

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520259

研究課題名（和文）アメリカ独立・建国神話の構築と南北戦争以前期の大衆文化受容との関連
についての研究研究課題名（英文）Nation (Re)Building through Popular Literature: The Myths of the
American Revolution and the Cultural Dissemination of Antebellum
Sensational/Sentimental Narratives

研究代表者：白川恵子（KEIKO SHIRAKAWA）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：10388035

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカ独立革命期の建国神話がいかに構築され、それが共和政期および南北戦争以前期の文化の中で、いかに表象され、大衆に受容されてきたのかを考察する。特に、(1) 建国祖父の伝記による独立革命の矛盾の曖昧化、(2) 共和政期以降の建国神話受容、(3) 独立革命のイデオロギーと文学的体制転覆的想像力との関連、(4) 南北戦争以前期の煽情主義的／感傷主義的ナラティブに反映・表象さえる建国神話に焦点が当てられる。

研究成果の概要（英文）：This project clarifies how the myths and spirit of the American Revolutionary relate to the sensationalism and sentimentalism that emerged in American culture in the late eighteenth and nineteenth centuries. In the course of investigation, the following points are especially focused on: 1) how idealistic biographical portraits of the Founding Fathers obscured defining contradictions of American Independence and nation building; 2) how exemplary myths of the Founding Fathers have been disseminated and received since the Republican period; 3) how these underlying contradictions, though obscured, nourished the subversive imagination in America; and 4) how this subversive American spirit is reflected in antebellum sensational/sentimental narratives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ建国神話、共和政期、アンテベラム期、大衆文化受容、ロマンス

1. 研究開始当初の背景

本研究の起点は、大衆文化の影響を色濃く受けたアメリカン・ルネサンスの主要作家が、いかに他の非主流作品や民衆文化史との間に、社会的、政治的、文化的相互交渉を行ってきたかという問いであった。これまで白川は、主に南北戦争以前期の人種的緊張関係に

焦点をあてながら、様々なアメリカン・ナラティブ内に生成される支配者側の言語戦略と被支配者側の体制転覆的想像力とを考察してきたが、その研究の過程で明らかになったのは、体制転覆的想像力を見据えたアンテベラム文学研究の根幹が、独立革命期と不可分かつ直裁的に連結しているという実例で

あった。従って、本研究では、アメリカ建国の政治的矛盾を内包する文化構築が、共和政期にどのように生成・散布され、また、領土拡大に伴う奴隷制論争喧しき折のアンテベラムキに、顕現化した矛盾が、どのように大衆作品内部に取り上げられ表象されたのかを、個別事例によって明示されることを意図する。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカ独立革命期の建国神話がいかに構築され、それが共和政期および南北戦争以前期の大衆文化の中で、いかに表象・受容されてきたのかを考察するものであるが、さらに換言すれば、その目的は、アメリカ文学の「再生」期から、アメリカ国家誕生の「起源」を捉え直すことにある。

独立革命期以降の建国神話や英雄物語が、その政治的矛盾を、いかに国民的「合意」へと読み替え提示したのか。そもそも最たる体制転覆の革命行為であるはずの独立戦争が、英雄的行為となるためには、どのような神話や英雄像の構築が必要であり、かつそれは、一旦封じ込めた国家建国時の矛盾が顕現化するアンテベラム期に、どのような影響を与えることになるのか。そして反逆者＝建国の祖＝英雄という神話が、アメリカン・ルネサンスという「振れ」とどのように関連し、こうした矛盾は、上記のアメリカン・ナラティブの系譜上、いかに表象されるのか。さらには、前景化され、同時に隠蔽された独立革命の体制反逆の精神が、アメリカ文化史上、いかなる言説の構築／脱構築をもたらすのかを提示していくのが本研究の目的である。

こうした内容を考察し、示すにあたって、本研究のいま一つの大きな特徴は、従来の、殊に我が国のアメリカ文学・文化研究において、あまり分析対象となつてこなかったテキストや文化事象を積極的に発掘し、紹介・分析することにある。例えば、それは、Mason Locke Weems, John Neal, George Foster, George Thompson, George Lippard, Stephen Burroughs, Alice Randal, Alcott のスリラーといった作家作品群であり、または、Cooper のようにキャノン作家でありながらも、その膨大な著作数ゆえに、ほぼ黙殺されてきた建国・共和政期の作品群でもある。さらには、文化的にも敷衍し、初期アメリカの領土拡大と先住民政策を、国璽とインディアン・ピース・メダルという図版から読み解く作業でもあり、はたまた、財団と著作権をめぐる奴隷制表象の提示方法の訴訟事例でもある。いずれにせよ、本研究は、従来の文学史上に新たなテキスト分析の可能性を拓けるよう貢献することを目標としている。

3. 研究の方法

昨今では、インターライブラリー・ローン・システムおよびデータベースの充実によって、かなりのテキスト資料が比較的容易に入手できるが、貴重書およびマイナーなパンフレットの類などは、その限りではない。従って、本研究に関しては、主に Harvard, Brandeis 両大学の図書館、Massachusetts Historical Society, American Antiquarian Society, Boston Public Library, Concord Public Library のデータベースおよび蔵書資料を入手することにより、研究・分析を充実させる。なお、Brandeis 大学の Michael T. Gilmore 教授、US Berkeley の Samuel Otter 教授とも積極的に交流し、教えを仰ぐ。

研究の進捗目標としては、基本的に、前年度の研究内代を翌年に口頭発表／論文出版により評価を問うものとする。実際、この4年間で、概ね、このスタイルは守られ、それが以下の成果となったと考える。

なお、本研究は、研究代表者と分担者の所属研究機関が同一であり、緊密に連絡を取り合える環境にあるため、通常は予想されうる分析・考察の重複や齟齬、また、それによる著しい進捗の遅れは、基本的には見られないであろうと想定する。ただし、論考の過程で、研究内容充実による考察範囲の拡大による進捗の若干の遅れは予期できる。実際、論考内容は、当初計画以上に広範囲に及んだものの、それらは、総じて、内容の充実をもたらす成果へとつながったことを記しておきたい。

4. 研究成果

上記研究概要に対して、これまでの4年間に、以下の考察をし、学会発表および論文出版によって、一定の成果を示した。簡潔にその内容を記す。

(1) ワシントン伝の構築と散布による独立神話の継続・継承（ウィームズのワシントン伝による）

(2) 国璽制定プロセスと領土拡大に伴うアメリカ建国神話と先住民との関係（インディアン・ピース・メダルとサカガウィア神話を中心に）

(3) 南北戦争前期の都市発展ならびに都市小説から見る建国の理念の矛盾（フォスター、トムソン、リップパードによる煽情的都市小説の考察）

(4) 悪漢自伝の生成と独立後のアメリカ社会批判精神の発露（パロウズの回想録の分析による）

(5) 建国神話の負の遺産としての奴隷制批

判とその煽情主義的／感傷主義的解決方法提示のナラティブ構築（ソローとオルコットの関連およびオルコットの短編の分析）

(6) 南部神話への抵抗と転覆（ミッチェル財団とアリス・ランダル作品出版を巡る法廷闘争から伺える文化事情）

(7) 独立革命期以降のスパイ神話の検証とロマンス表象との連関（おもにクーパー作品の分析による）

(8) 環大西洋的視座から見たアメリカ独立と神話構築への再評価（おもにクーパー作品の分析による）

(9) 共和政期、アメリカ近海を舞台とした海洋物語ジャンルの生成とそれが建国神話に及ぼした構築的・脱構築的影響を探る試み（おもにクーパー作品の分析による）

上記は、全て以下の項目「発表論文等」が示すとおり、口頭発表あるいは論文として出版された。個々の全ての内容は、アメリカ文学史・文化史上に配置したときに、さらなる発展・展開を見込めるだろうが、特に(4)と(9)に関しては、他作品の分析へと考察を敷衍させつつ、論考の精緻化と有益化を図る予定である。なお、出来る限り近い将来に単著としての出版を目指したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 林以知郎「*The Pilot* と環流する想像力—Fenimore Cooper の海洋ロマンス群論に向けて」『同志社アメリカ研究』第48巻、25-51頁、2012年3月、査読有。
- ② 白川恵子 “The American Eagle and Bird Woman: Early America’s Nation Building and Its Native American Policy.”『同志社大学英語英文学研究』第88号、1-57頁、2011年3月、査読有。
- ③ 林以知郎「亡霊と痕跡—クーパーの *Lionel Lincoln* とスパイ・アンドレ伝承」『同志社アメリカ研究』第46号、35-60頁、2010年3月、査読有。
- ④ 林以知郎「祝祭と憑在—建国期アメリカ文化と異人たちの帰還」『北海道アメリカ文学』第25号、1-15頁、2009年3月、査読無。

〔学会発表〕（計9件）

- ① 林以知郎「アメリカニストの立ち位置から」特別シンポジウム「外国語外国文学会の現下の課題」日本英文学会第84回全国大会、2012年5月27日、於：専修大学生田キャンパス。
- ② 林以知郎「スパイと海賊—フェニモア・クーパーが苦手な方のために」九州アメリカ文学会第59回大会特別講演、2012年5月13日、於：熊本大学（招待発表）。
- ③ 林以知郎「難船体験とアメリカとの遭遇」日本アメリカ文学会関西支部第55回支部大会フォーラム『Natural Disaster とアメリカの想像力』、2011年12月3日、於：於武庫川女子大学。
- ④ 白川恵子「そして誰もが黒くなった—Alice Randall の *The Wind Done Gone* (2001) と Suntrust Bank v. Houghton Mifflin. Co.」関西アメリカ文学会例会、2011年11月5日、於：相愛大学。
- ⑤ 白川恵子「市民的不服従・修辭的権威—*Memoirs of Stephen Burroughs* (1798) を読む」アメリカ学会第45回年次大会、2011年6月4日、於：東京大学。
- ⑥ 白川恵子「ルイザ・メイ・オルコットの煽情物語—奴隷制・人種表象を中心に」日本ソロー学会、2010年度全国大会、2010年10月8日、於：青山学院大学。
- ⑦ 白川恵子「遺産相続の物語—George Lippard の都市犯罪ミステリ *The Empire City* (1849) と *New York: Its Upper Ten and Lower Million* (1853)」関西アメリカ文学界例会、2009年7月11日、於：京都外国語大学。
- ⑧ 林以知郎「祝祭と憑在—建国期アメリカ文化と異人たちの帰還」日本アメリカ文学会北海道支部大会、2008年12月20日、於：北海学園大学（招待発表）。
- ⑨ 白川恵子「メイソン・ロック・ウィームズの『ワシントン伝』再考」日本英文学会第80回全国大会、2008年5月24日、於：広島大学。

〔図書〕（計7件）

- ① 白川恵子『ソローとアメリカ精神—米文学の源流を求めて』金星堂、「奴隷的不服従—ルイザ・メイ・オルコットのセンセーショナル・スリラーにおける抵抗と復讐」を

執筆、現在印刷中。

- ② 白川恵子『アメリカ文学における「古い」の政治学』松籟社、「そして誰もが黒くなった—アリス・ランドルの『風は去っちまった』における再生の政治学」を執筆、273-97 頁、2012 年 3 月。
- ③ 白川恵子『アメリカ—<都市>の文化学』ミネルヴァ書房、「帝都の物語—フォスター、トムソン、リップードにおけるアンテベラム・ニューヨーク」を執筆、17-51 頁、2011 年 3 月。
- ④ 白川恵子『バード・イメージ—鳥のアメリカ文学』金星堂、「アメリカン・イーグルとバード・ウーマン—初期アメリカの国家形成と先住民政策」を執筆、17 - 42 頁、2010 年 3 月。
- ⑤ 白川恵子『独立の時代—アメリカ古典文学は語る』世界思想社、「売れる偉勲・憂うる遺訓—ウィームズの『ワシントン伝』再考」を執筆、29-58 頁、2009 年 6 月。
- ⑥ 林以知郎『独立の時代—アメリカ古典文学は語る』世界思想社、「『開拓者たち』と家系譜の書き換え—上機嫌な時代の自己意識的なアメリカニズム」を執筆、59-82 頁、2009 年 6 月。
- ⑦ 白川恵子『シグニファイング・モンキー—もの騙る猿／アフロ・アメリカン文学批評理論』（ヘンリー・ゲイツ・ジュニア著）、南雲堂フェニックス、初めに、序章（7-29 頁）を翻訳、2009 年 12 月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白川恵子 (SHIRAKAWA KEIKO)
同志社大学・文学部・准教授
研究者番号：10388035

(2) 研究分担者

林以知郎 (HAYASHI ICHIRO)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：90097858